

あだたら



大草原とモンゴルの移動式住居ゲル



ウランバートル市にある新モンゴル高校



指導法改善プロジェクトで作った指導書



◇ 特集 ◇ 教師海外研修レポート モンゴル

モンゴルの今を 現地に行った先生から聞こう!



8月16日～26日まで、JICA二本松主催の「教師海外研修」が行われ、福島県内から5名の先生方が、日本の国際協力の現場の視察や現地の人々との交流などを行いました。この研修を通してたくさんの素材を持ち帰り、モンゴルを題材とした授業を行っておられます。現地に行った先生方だから伝えられるフレッシュなレポートをお届けします。

参加した先生からのレポート ～印象に残っている現地の人々のエピソード～



福島県立あさか開成高等学校 吾妻 美和 先生

今回、限られた時間ながら、協力隊として活動する日本人の方々にお会いしました。中には教員という同じ立場の方々もおられ、2005年から教育改革が進みつつあるモンゴルにおいて、日本の教育支援が現地の学校にどのような形で導入されているのかについてもお話を伺うことができました。風土が異なる国、地域で活動する方々の熱意を感じるとともに、今回の研修で私たちに求められる姿勢についても考えさせられた出会いでもありました。



福島県立須賀川高等学校 吾妻 久 先生

Би чамайг мартахгүй. (ビーチャマエグ マルタフグエ)「私はあなたを忘れません。」コトバはうまく伝わらなかったけど、いつか日本に来ることがあったら、モンゴル式で乾杯をしましょう！関係者の皆さんには、心から本当に感謝しています。大人から子供まで、現地の方々が見ず知らずの私たちを助けてくれました。もう直接お礼はできませんが、今度は私たちがモンゴルから日本に来ている皆さんの力になって、その恩に報いることができればと思っています。



学校法人有朋学園東日本高等学院 齋藤 道子 先生

「底抜けに明るい笑顔とはじけるパワー！」がモンゴルで会った子ども達の印象ですが、冬には-30℃にもなるこの町には「マンホールチルドレン」が存在します。セーブザチルドレン事務所で会った8~17才の彼らは、顔や腕に傷を持つ子もおり、笑顔と交錯して目をそらしたり怒ったりという顔を見せました。本当は誰かに甘えたいはずです。今回の短い訪問が、何か彼らのためになったのか、私たちはどう映ったのか、少しの心苦しさが残りました。



福島市立大森小学校 佐藤 かおり先生

今回の研修はウランバートルを中心としたものでしたが、1泊した遊牧民のゲルでのホームステイでは「草原の国」モンゴルを感じることができました。太陽光発電を使うことにより衛星テレビを見ることができ、携帯電話を使っている連絡方法など近代化された遊牧民の生活の変化が見られ驚きました。ホストファミリーの子どもたちの素直さにはさすがしくさえ思いました。広大な草原での生活について体験できたことが貴重な経験でした。



JICA 二本松 市民参加協力調整員(同行者) 渡邊 敦

訪問先のどこに行っても、熱を帯びた意見交換が繰り返されてきたことが、とても印象深く残っています。前向きに考えることができるからこそ、互いにとっていい出会いになるのだと、改めて気付かされた、そんな研修でした。

◀オボと呼ばれる一里塚

帰国後に早速、
中学校で授業実践
を行いました。

南会津町立檜沢中学校
高澤 正男 先生

教師海外研修モンゴル派遣に参加した高澤先生が、10月21日に授業実践を行いました。家庭科の時間を使って、主に日本とモンゴルの衣食住の違いについて勉強しました。

日本の着物のように、モンゴルにはデールと呼ばれる民族衣装があること、牛や豚ではなく、モンゴルでは羊が多く食べられること、大きなテントのような住居ゲルは、草原だけでなく街の中にもあって中は意外とせまいことなど、日本との違いを紹介していきます。

とくに生徒たちが驚いていたことは、日本とモンゴルの人口密度の違い（モンゴルはとても少ないこと）、それから草原でのゲル滞在時、水道もお風呂もトイレもなかったと伝えたときには、教室から驚きの声が上がりました。

最後にそのような違いが生まれる背景、また日本がモンゴルに国際援助を行っていることを紹介し、なぜ必要なのかについても話し合い、考えを共有しました。



▲2年生のクラスで、写真集を開いて民族衣装や風景を見せる高澤先生。



1年生のクラスで、モンゴルの移動式住居「ゲル」の模型を使って説明する高澤先生。中身が開いて中の様子も見えるようになってくる。

生徒の声

- 日本とモンゴルの衣食住を比べて、違いがよく分かった。知らないことを知ることができた。(1年)
- 国際援助は、世界のみんが不自由なく暮らせるように必要だと思う。(1年)
- ODAのことを詳しく知りたいと思った。(2年)
- モンゴルについての考え方が変わった。(3年)
- 日本と関係の深い国だということがわかった。(3年)



高校生国際協力ミーティング

9月11日～12日に、JICA二本松で「ユース国際協力ミーティング2010」を開催しました。このミーティングは、青年海外協力隊事業の紹介を通じて、国際協力やボランティア、多文化共生について理解すること、また自発的に考え、行動できる地球市民を育成することを目的として、高校生を対象に年1回行っています。高校生活3年間、3度とも通ったりピータが2名いました。この参加者は「ここでかけがえのない友人を作ることができて、本当に楽しかった」と話してくれました。



▲民族衣装を着て、村人を体験

◀ワークショップでチームビルディングを強化

平成 22 年度秋募集 JICA ボランティア説明会

9月26日、郡山駅前のビッグアイでJICAボランティア説明会が行われました。この日は、会津若松市出身の石川友美さんが青年海外協力隊の体験談を行いました。石川さんがバヌアツ共和国で小学校教諭として活動していたときに、現地の様子をテレビユー福島が取材し、テレビ放映されました。そのときの反響が大きかったため、今回の石川さんによる体験談の様子もテレビユー福島にて放映されることになりました。参加者は、当時のバヌアツでの生活や活動の様子に耳を傾け、協力隊についてのイメージをつかむことができました。



体験談のあと、個別相談に応じます



写真を使って説明する石川さん

結・ゆい・フェスタ & Fukushima 地球市民フェスティバル 2010

9月25日に、福島市の街なか広場で「結・ゆい・フェスタ & ふくしま地球市民フェスティバル2010」が開催されました。当日は午前中に小雨が降り、肌寒い天候ではありましたが、2,500名ものたくさんの来場者が集まりました。世界のステージや屋台村、国際交流・協力の分野の団体によるブース展示のほか、会場内を巡って景品をゲットスタンプラリーもありました。参加者からは良かった点について「NGOの活動を知ることができた、外国人と交流できた」などの声が聞かれました。



アフリカのジャンベ演奏

駅の近くの会場で、お年寄りから親子連れまで集まりました

ガーナ人材育成

野口英世博士ゆかりの福島県で、ガーナから研修員の受け入れを開始することになりました。11月から、「稲作振興」「産業振興支援」「道路管理技術」「初等教育」の4つの分野の研修コースが始まります。今回は初等教育以外の3コース、25名が来日しました。全分野において、野口英世博士記念館訪問を予定しています。

次回、冬号において、研修内容をレポートします。



研修員と J I C A 橋本理事

福島県知事表敬の様子